未発表作品（1990年制作）

山田花子

「世界はウソつき」

同級生より先にちん毛が生えただけで、いじめられてる男子。

子供って一生の内で最も「生きもの」な時期だね。

子供も一緒にいなきゃならない。

（義務感としての「先生」を忠実に行う）

©「書を捨てよ町へ出よう」より。

お友達が いなくて さびしく ないの
別に平気
ヨーコ、強情張るのは やめなさい！
強情だ なんて‥‥
肉親ほどかみ合わない関係ってないぞなもし。
（はみだしコンビ）
マサエが クラスの 「表問題児」で ヨーコは 「裏問題児」 なのだ。
ぽ〜〜ッ
あ〜〜
パタ
パタ
親と担任が 「心配」するから 少しはクラスに なじまなきゃ
ガヤ
ガヤ
ね、ねえ 何盛り 上ってるのォ？
ん？ドラマの話。（※「ドラマ」の発音は ロッカーの「ロフト」、「ギター」と同じ。）
うつろな瞳をしてみせる。
つまんない連中。
人は皆、忍者ハッタリ君。
（大人っぽく見せかけ上手。）

……
ヤバイ!
間があいてしまった。
何か言わなきゃ
ハッ!

へ～～～え
そうなんだー

シラ～
そうなの。

……
また間があいちゃった
……

フフフ
少女の特権、
おおらかな失笑。
フフフ…

どんな
・・・
ドラマが
すきなの

いいよ
ムリして
話合せて
くれなくても
……

モナリザのようなホホエミ。

くっ
その手には乗らないぞ

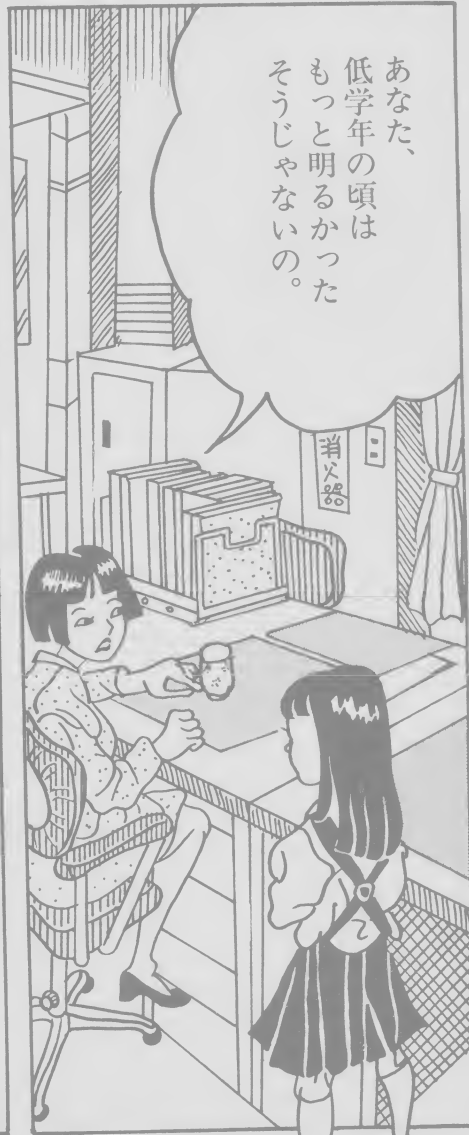
ん？どうしたの
うかつに心を開けばたちまちズタズタに傷ついてしまう

先生に言ったって通じないもん……
アラ、そんなの言ってみなきゃわかんないじゃない。

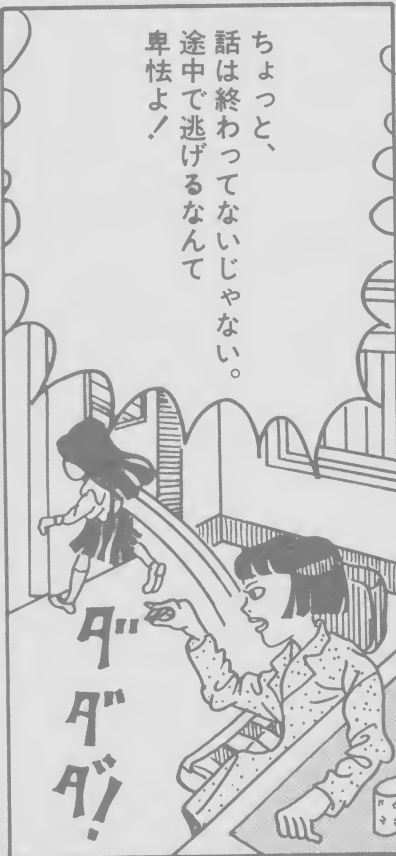
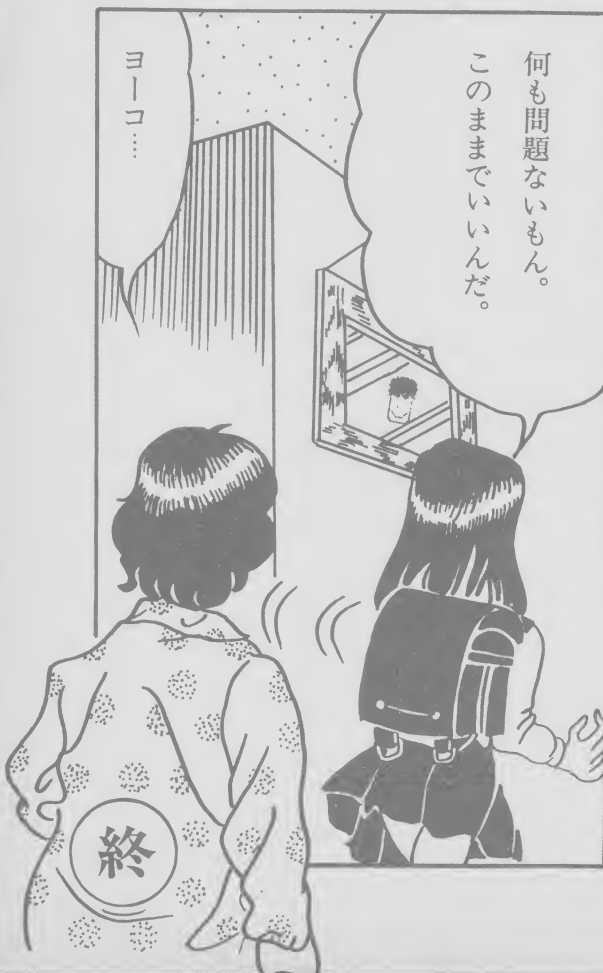
思い切って打ち明けてちょうだい。
スッキリするわよ

そう…そこまで頑くななら仕方ないわね。先生も嫌われたものだわ…。

（うんとさみし気に…）

あのう…人げんて、皆一人ぼっちだからどうせ、かみ合わないと思うとダルくて…

それは
仕方ない
ことでしょ？

※つきはなしたように
冷やかに。

みんな大っきらい
ゴーッ
何もかも粉々に砕けてしまえ

「ぱんこと花子の底辺の笑い」

みぎわパン

山田花子と私の会話は、たいてい3コマ漫画でカタがつく。キャッチボールにならないのだ。

　私が何か言って、それに対して山田花子が私をくやしがらせるようなことを言って、まんまとくやしがる私。で、はにかむようなくやしいような、ヘンな笑いが込み上げておしまい。

　おもいでを語るネタとしちゃ、このパターンの小間切れでムリがある。

　ここに、ミミヨちゃんが加わると16コマはもつ。ミミヨちゃんは、うまい。

　山田花子が、珍しくしつこく話しかけてきたことがあった。

山田「ねー、いまガロでしか描いてないよね。」

私「うん。でもイラストは少しやっとる。」

山田「どこでやってる」

私「えっと……えっと……」

山田「バイトとかしないの？　じゃ、漫画だけ？」

私「う…うん。安い物食ってるから。」

　仕事がないのを指摘されたのかと思ってムカついた。山田花子は、例の小さな声でもって「もうずーっと？」とか「ふしぎィ〜〜」とか言い続けていた。私はくやしいのを通りこしてイライラした。

　あとで判ったけど、山田花子、バイトをしないで済む方法を知りたかったんだよなー。バイト先や社会は山田花子にとって、やっぱしオッソロシイ所だったんだろうね。私のこともさぞやオッソロシイかろーねー。

　山田花子、いい漫画はちゃ〜んと大好きで、情報通とは見受けられんのに、ちゃ〜んといろいろ知っていた。

山田「某さんって、もーほとんど絶筆中なんだって。」

私「えっ!?　あ〜あ、やっぱしー。ガックリきちゃうな。夢を壊すなぁ。描いてくれんと、こっちは生きがいなくなるよ！」

山田「チョット。しっ・か・り・し・な・き・ゃ・だ・めよー」

山田・私――笑――

　山田花子って、こうやって時どき〝そっくりそのまま返してやりたいような言葉〟を吐く。わざとお姉さんぶって、窘めるみたいにして笑わせる。その笑いはさっきの、はにかむようなくやしいような、もどかしい種類のものだ。「くよくよしちゃだめよ」「しっかりしなきゃ」とか。わざとなの。ワザと。

　山田花子は、社会の仕掛けが解ってた。たぶん、漫画に出てきた〝世界の罠〟ってやつだと思う。

　それで、わざとお姉さんぶったり先生ぶったりしてくやしがらせてみて、いまいちど会話の中で同じコト味わって互いに笑う。漫画にも、くやしい状態がしょっちゅう出てきて私を笑らかす。

　もう、新作が発表されないかと思うとガックリくる。しかし、よく描いてくれて、ありがとう。

　普通、社会の罠ばかり描いてると読む側も描く側も疲れるから、新しい方向性みつけるんだけど、山田花子ったら最後まで描き続けてくれた。今読んでも、何度読んでも「こりゃ狂うわ」って、敬意をはらう。

　山田花子と、やきとりを食べた。遊園地にも行った。アフリカ館は二度もはいったね。テレビ出演の応援にも行った。

　これからも一緒に遊ぶ（連れまわす）気でいたら、ガツーンと一発してやられた。

　期待して、人生に助平になってると、ガツーンて一発夢を壊されて、恥ずかしい状態に陥ってしまう。

　〝信じるものは救われない〟山田花子の漫画とおんなじパターンだ。あー、くやしい。

　一般が描けなかったことを描いたのだから、正しいのだ。正しい作家と知り合えて、私は運がいい。関わることができた。しあわせだ。また会える。

　山田花子!!　また会おう。今度こそ、少しくらいは傷つけあって、ちんちんまんまん見せ合って、つき合おう！　サバラ!!

「山田花子サン」キオクヲコエテアイタイ

友沢ミミヨ

熱海に行った時、彼女は珍しく饒舌で、大川興業のコントの話や、学生の頃の話、デビューの頃の「キチガイみたいに細かい線ひいてた」話などしてくれた。「今は随分マトモ。」と言って、へへっと笑った。

秘宝館のポルノ映画コーナーで、「なんだか(自分が)玩具にされてるみたい」と囁かれ、ヒゲ面の親父化して見ていた自分は、消え入りそうに〝ごめんごめん〟と思った。

海底温泉では、私だけ恥ずかしがってて馬鹿みたいだった。

誕生日のプレゼントをもらった時、「わーうれしいー」といってから、シマッたと思った。

ぱんこちゃん達と遊園地に行った。その次に会った時「こないだの写真もらった?」と聞くと「心霊写真、うつってなかったね」と即答され、マイッた。

ファンキートマトというTV番組で根本敬さんがやってた〝特殊漫画教室〟に出演しませんか、と誘った時の返事は図のとおり。手強かった。

テクノパーティーに誘った時は「ミミヨちゃんが行くんだったら私も行く〜♡」というFAXが送られてきた。可愛いかった。

私がムクムクの服を着てた時は、目を輝かせて「かわいいー」(洋服がね)と、動物系への弱みを露わにしていた。子供のようだった。

年末の或るイベントで、彼女はコントを演った。一人六役。家族コント。大学ノートにびっしりと書かれた台本をたまに確認しながら、小物と声色で役を演じわける。エプロンを着けてお母さん、「おはよう」眼鏡をかけてタマミ、「おはよう」ちゃんちゃんこを着てお婆ちゃん「どうしたんだい」ひげシールをつけてお父さん「おい、何やってんだ」…軽快なコントのようだが、全然軽快ではない。

一切は山田花子時空でゆるゆると流れる。10分…20分…30分…静まりかえる客を前に、彼女はコント〝その13〟まで演り終えた。格好よかった。最高に孤高だった。(ひげシールをつけた時は一寸恥ずかしそうだったけど。)

記憶の羅列しか出来ない。

無念です。 ——合掌。

こっちは根本さんがかいてくれた方

こっち 山田花子画